

保存版

こどものための 予防接種のしおり

令和7年4月発行



私たちの身の周りには、細菌やウイルスによって引き起こされる様々な感染症があります。こうした感染症にかからないようにするために、予防接種によって感染症に対する抵抗力(免疫)をつけておくことは、とても大切なことです。

予防接種を受ける前には、この「予防接種のしおり」を必ずお読みいただき、内容をよくご理解いただいたうえで、接種を受けてください。

◆ 予防接種の受け方について ◆

生後2か月を過ぎると小児用肺炎球菌や五種混合などが受けられます。接種スケジュールについて、かかりつけ医と相談しながら、計画的に接種しましょう。

BCGの接種対象年齢は、生後1歳未満までです。結核予防のために、きちんと接種しましょう。

また、満1歳になったら、麻しん、風しん予防接種を優先して接種しましょう。麻しんは感染力が強く、発症すると重い合併症を起こすことがあり、お子さんにとって負担の大きい病気です。特に、集団生活をしているお子さんには、早めの接種をおすすめします。



横浜市医療局

目 次

1	予防接種とは	P 1
2	予防接種の上手な受け方	P 1
3	横浜市の予防接種	P 1
4	予防接種前に注意していただきたいこと	P 5
5	予防接種後の注意	P 7
6	ワクチンの種類と特徴	P 9
7	予防接種の有効性	P 9
8	予防接種の対象となる感染症と予防接種による副反応	P 10
9	予防接種の救済制度	P 27
	【参考】委任状の書式（例）	P 29
	お問い合わせ先	P 30

◆ 予防接種に行く前のチェック ◆

- 1 医療機関に予約はしましたか？
（もしくは予約が不要な旨を確認しましたか？）
- 2 お子さんの体調は良いですか？
- 3 今日受ける予防接種について、必要性、効果及び副反応などについて、理解していますか？
分からないことがあれば、質問をメモしておきましょう。
- 4 母子健康手帳は持ちましたか？
- 5 住所が確認できるもの（健康保険証等）は持ちましたか？
- 6 予診票の記入は済みましたか？
- 7 保護者が同行できない場合は、委任状（p 6、29 参照）を用意しましたか？

1 予防接種とは

私たちの身の周りには、細菌やウイルスによって引き起こされる様々な感染症があります。こうした感染症の原因となるウイルスや細菌又は菌がつくり出す毒素の力を弱めてワクチンをつくり、これを体に接種して、その感染症に対する抵抗力(免疫)をつけることを「予防接種」といいます。

予防接種には、一人ひとりを感染症から守るだけでなく、その積み重ねによって社会全体としての抵抗力(免疫)を維持し、感染症そのものの流行を抑える目的もあります。「病気が流行していないので、予防接種はもう必要ないのではないか」という声も聞かれますが、一人ひとりが抵抗力(免疫)をつけているからこそ、流行が抑えられているのです。

◆ 感染症 ◆

ウイルスや細菌などの微生物が体内に入り、体内で増加することにより発症する病気のことです。微生物の種類によって、発熱や咳、頭痛をはじめとする様々な症状が出現します。

2 予防接種の上手な受け方

「予防接種」と聞くと、副反応が心配な方もいらっしゃると思います。しかし、予防接種の対象となっている感染症は、万一かかってしまうと重い症状が現れたり、治った後も障害が残ることが心配されているものばかりです。

現在、日本で使用しているワクチンは副反応が少ないものです。しかし、人間の体質は一人ひとり異なるため、程度は色々ですが、副反応が出る場合もあります。

接種にあたって、少しでも心配なことがあるときや接種を受けるかどうかの判断に迷ったときは、かかりつけ医とよく相談し、十分に納得したうえで予防接種を受けるようにしましょう。

◆ 副反応 ◆

予防接種を受けると、免疫ができるという効果以外に、アレルギー反応などの症状が現れる場合があります。それらを総称して「副反応」といいます。予防接種を受けたあと、心配な症状が出た場合には、早めに接種した医師か、かかりつけ医にご相談ください。予防接種ごとの副反応については、8ページ以降をご覧ください。

3 横浜市の予防接種

横浜市が実施している予防接種は、「予防接種法」によって定められているもので、「**定期接種**」と呼ばれています。原則、接種日時点で横浜市に住み票がある方が対象です。

2・3ページの表の接種対象年齢に相当する方は、無料で接種できます(※1)。接種を受ける際には、「母子健康手帳(※2)」、「住所を確認できるもの(健康保険証等)」、「予診票(接種券)」をお持ちください。予診票は、接種対象年齢になる前に個別通知でお送りします。

なお、**「定期接種」ではない予防接種は、「任意接種」と呼ばれ、費用は自己負担**となります。

※1 平成25年1月30日から、病気により長期間の治療を受けていることで、定期の予防接種を接種対象年齢の間に接種できなかった場合、接種できるようになった日から2年間を経過するまでの間、定期の予防接種として無料で接種できるようになりました。

手続き方法などの詳細については、接種前にお住まいの区の区役所健康づくり係にお問い合わせください。**その他、事情により、接種対象年齢を超えてしまったときに、公費による接種の対象となる場合があります。母子健康手帳(または接種記録の確認できるもの)をご用意のうえ、できるだけ早めにお住まいの区の区役所健康づくり係(30ページ参照)に相談して、すみやかに接種を受けてください。**

※2 **予防接種の記録(母子健康手帳等)は、一生大切に保存してください。**就学、海外渡航時に必要となる場合があります。また、中学校入学後に母子健康手帳を紛失した場合には、再交付はできません。過去の接種歴が不明な場合は、医療機関において通常5年間カルテが保存されていますので、接種した医療機関に直接お問合せください。それでも不明な場合は、接種の前に医師にご相談ください。

◆定期予防接種一覧（通年）（令和7年4月時点）

横浜市ホームページ又はお住まいの区の区役所健康づくり係で配付している「横浜市予防接種協力医療機関名簿」に掲載されている医療機関で接種できます。予約が必要な場合もありますので、事前に電話で確認してください。

※接種当日は0日目

ワクチン名	種類	対象疾病	接種をおすすめる年齢 (標準の接種年齢)と接種方法		無料で受けられる年齢 (接種対象年齢)	接種完了チェック	
						接種回数	完了した場合は○
小児用肺炎球菌 ※1 【4ページ参照】	不活化	肺炎球菌による肺炎、髄膜炎、中耳炎等	初回	生後2か月～7か月未満の間に接種開始し、 生後12か月までに27日以上の間隔で 3回	生後2か月～60か月〔5歳〕未満 (追加接種は生後12か月以降に接種を行います)	4回	
B型肝炎 ※2 【4ページ参照】	不活化	B型肝炎	1回目、2回目 3回目	生後2か月、3か月 27日以上の間隔で 2回 1回目接種後、139日以上の間隔で 1回 (生後7か月～8か月)	生後1歳未満	3回	
ロタウイルス	生(経口)	ロタウイルス胃腸炎	それぞれの接種対象年齢の間に、いずれかのワクチンを2回、または、3回接種 (※全て同じワクチンを接種)		ロタリックス【1価】 出生6週0日後から出生24週0日後まで	2回	
			1回目	生後2か月から出生14週6日後までに接種	ロタテック【5価】 出生6週0日後から出生32週0日後まで	3回	
五種混合 ※3 (DPT-IPV-Hib) 【4ページ参照】	不活化	ジフテリア、破傷風、百日せき、ポリオ、ヒブ	1期初回	生後2か月～7か月未満の間に接種開始し、 20日～56日の間隔で3回	生後2か月～90か月〔7歳6か月〕未満	4回	
			1期追加	初回接種(3回)終了後、6か月～18か月の間に 1回			
BCG	生	結核	生後5か月～8か月未満の間に 1回		生後1歳未満	1回	
麻しん風しん混合 (MR)	生	麻しん、風しん	1期	生後12か月～24か月未満の間に 1回	生後12か月～24か月未満	2回	
			2期	5歳～7歳未満で小学校入学1年前の4月1日～ 入学する年の3月31日までの間に 1回	5歳～7歳未満で小学校入学1年前の 4月1日～入学する年の3月31日まで		
水痘	生	水痘	初回	生後12か月～15か月未満の間に 1回	生後12か月～36か月未満 〔1歳、2歳〕	2回	
追加	初回接種終了後、6～12か月の間に 1回 (最短3か月以上の間隔で接種可能)						
日本脳炎 ※4 【4ページ参照】	不活化	日本脳炎	1期初回	3歳中に6日～28日の間隔で 2回	生後6か月～90か月〔7歳6か月〕未満 (3歳未満は、接種量が半分になります)	4回	
			1期追加	4歳中に 1回 (初回接種(2回)終了後、おおむね1年後(最短6か月以上))			
			2期	9歳中に 1回			
二種混合(DT)	不活化	ジフテリア、破傷風	2期	11歳中に 1回	11歳～13歳未満	1回	
子宮頸がん予防 ※5 【4ページ参照】	不活化	子宮頸がん	中学1年生時に、いずれかのワクチンを規定回数接種(※全て同じワクチンを接種)		小学校6年生～高校1年生相当 (女の子)	3回	
			サーバリックス 【2価】	1回目の接種から1か月後と6か月後に接種			
			ガーダシル 【4価】	1回目の接種から2か月後と6か月後に接種			
			シルガード9 【9価】	初回接種が 【15歳未満】1回目の接種から6か月後に接種 【15歳以上】1回目の接種から2か月後と6か月後に接種			

※1 小児用肺炎球菌予防接種について

初回接種を開始した月齢ごとに接種方法が異なります。

(標準スケジュールから外れた場合の接種方法は、10ページ参照)

標準スケジュール生後2か月～7か月未満に接種開始

○小児用肺炎球菌：生後12か月までに27日以上の間隔で3回接種し、初回3回目の接種後60日以上の間隔で、生後12か月以降に1回追加接種をします。(追加接種は生後12～15か月を標準とします。)

※初回2回目及び3回目は、生後24か月未満までに接種

(生後24か月を超えた場合は残りの初回接種を行わず、追加接種を1回のみ行います。)

また、生後12か月を超えて初回2回目を接種した場合は、初回3回目の接種は行わず、上記の間隔で、追加接種を1回のみ行います。)

※2 B型肝炎予防接種について

1回目の接種から3回目の接種を終えるまでに、約6か月を要します。(接種方法等は、11ページ参照)

*HBs抗原陽性の妊婦から生まれたお子さんで、母子感染予防のためにB型肝炎ワクチンの接種を受けている場合は、定期予防接種の対象外となります。引き続き、健康保険の適用によるワクチン接種を受けてください。

※3 五種混合予防接種について

令和6年4月から、従来の四種混合ワクチンにヒブワクチンを追加した五種混合ワクチンでの接種を実施しています。四種混合ワクチンで接種を開始したお子さんは、原則残りの接種も四種混合で接種してください。

※4 日本脳炎予防接種について ～積極的勧奨の再開に伴う対応～

平成17年5月以降、一時、接種の積極的な勧奨が差し控えられていましたが、新たなワクチンの開発により、平成22年4月から、順次、積極的勧奨が再開されています。

現在、接種が完了していない方のうち、生年月日が「平成17年4月2日～平成19年4月1日」の間の方は、救済措置として、20歳未満まで接種可能となっています。(詳しくは、21・22ページ参照)

○救済措置の対象者の方は、接種歴によって、接種方法が標準の接種方法と異なる場合がありますので、接種する前に横浜市予防接種コールセンターへお問い合わせください。(30ページ参照)

○令和7年4月1日時点で、生年月日が「平成7年4月2日～平成17年4月1日」の方は既に20歳以上のため、救済措置の対象外となります。また、生年月日が「平成19年4月2日～平成21年10月1日」の間の方は、2期の接種期間中に、1期の未接種分を接種することが可能でしたが、令和4年10月時点で対象者が全員13歳以上となったため、措置は終了しました。

※5 子宮頸がん予防接種について～積極的勧奨の再開に伴う対応について～

平成25年6月以降、国の通知により、接種の積極的な勧奨が差し控えられていましたが、最新の知見を踏まえ、ワクチンの安全性に特段の懸念が認められないこと、接種による有効性が副反応のリスクを明らかに上回ることが認められることなどから、令和4年4月から、積極的勧奨を再開しています。この間、接種の機会を逃した方への救済措置として、接種が完了していない方のうち、生年月日が「平成9年4月2日～平成20年4月1日」の間の方は、令和7年3月31日まで接種が可能でした。

更に、救済措置最終年度(令和6年度)での接種希望者の増加に伴うワクチン不足等を踏まえ、国により経過措置が設けられました。救済措置対象者と、救済措置期間の最終年度に高校1年生相当であった方で、救済措置対象期間中(令和4年4月1日から令和7年3月31日まで)に1回以上接種した方は、残りの回数について令和8年3月31日まで無料で接種可能です。(詳しくは、3、23～26ページ参照)

4 予防接種前に注意していただきたいこと

(1) 予防接種を受けることができない方

必ずお読みください

次のようなお子さんは接種を受けられません。

- ア 明らかに発熱（通常 37.5℃以上）しているお子さん
- イ 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかなお子さん
- ウ その日に受ける予防接種の接種液に含まれる成分で、アナフィラキシーを起こしたことがあることが明らかなお子さん
- エ BCG接種の場合
 - ・ 予防接種や外傷等によるケロイドが認められるお子さん
 - ・ 過去に結核にかかり、治療を受けたことがあるお子さん
- オ ロタウイルスワクチン接種の場合
 - ・ 未治療の先天的な消化管障害があるお子さん
 - ・ 過去に腸重積症をおこしたお子さん
 - ・ 重症複合型免疫不全（SCID）があるお子さん
- カ その他、医師が不適切な状態と判断した場合

◆ アナフィラキシー ◆

通常、接種後 30 分以内に起こるひどいアレルギー反応のことです。汗がたくさん出る、顔が急に腫れる、全身にひどいじんましんが出るほか、吐き気、嘔吐、声が出にくい、息が苦しいなどの症状に続き、ショック状態になるような激しい全身反応が出現することがあります。

(2) 予防接種を受ける際に注意を要する方

以下に該当する場合、必ずかかりつけ医にお子さんを診てもらい、予防接種を受けてよいかどうかを事前に判断してもらいましょう。また、接種は、かかりつけ医で受けるか、あるいは、かかりつけ医に相談のうえ、必要に応じて別の医療機関で受けましょう。その際、その医療機関が予防接種協力医療機関であるかについても確認してください。

- ア 心臓病、腎臓病、肝臓病、血液の病気や発育障害などで治療を受けているお子さん
- イ 予防接種で、接種後 2 日以内に発熱のみられたお子さん又は発疹、じんましんなどアレルギーと思われる異常がみられたお子さん
- ウ 過去にけいれん（ひきつけ）を起こしたことがあるお子さん
 - けいれん（ひきつけ）の起こった年齢、そのとき熱はあったか、その後けいれん（ひきつけ）を起こしているか、接種するワクチンの種類などにより、条件が異なります。必ずかかりつけ医と事前に相談しましょう。
- エ 過去に免疫不全の診断がされているお子さん及び近親者に先天性免疫不全の方がいるお子さん
- オ ワクチンの製造過程で培養に使う卵の成分や抗菌薬、安定剤などにアレルギーがあると言われたことのあるお子さん
- カ BCG 接種の場合、過去に結核患者との長期の接触があるなど、結核感染の疑いのあるお子さん
- キ ロタウイルスワクチン接種の場合、活動性胃腸疾患や下痢等の胃腸障害があるお子さん
- ク 子宮頸がん予防ワクチン接種の場合、妊娠されている方、妊娠している可能性のある方

(3) 一般的注意

予防接種は、体調の良いときに受けるのが原則です。日頃から、保護者の方はお子さんの体質、体調など健康状態によく気を配ってください。何か気にかかることがあれば、あらかじめ、かかりつけ医にご相談ください。

ア 前日まで

- (ア) 受ける予定の予防接種の必要性や副反応について（10 ページ以降を参照）、よく理解しましょう。分からないことは、接種を受ける前に接種医にお問い合わせください。
- (イ) これまでに受けた予防接種によって強いアレルギー反応を起こしたことがある方や、過去にけいれんを起こしたことがある方、基礎疾患のある方は、事前にかかりつけ医にご相談ください。
- (ウ) 事前に接種日時などについて、予防接種を受ける医療機関にお問い合わせください。
- (エ) 都合により、**横浜市以外の市区町村で予防接種を希望する方は**、事前にお住まいの区の区役所福祉保健課健康づくり係（30 ページ参照）へご相談ください。

下記の事情により市外で定期予防接種を受ける場合、事前に必要な手続きをしていただくことにより、接種に係る費用の払い戻し（償還払い）を受けることができます。なお、申請から払い戻しまで2～3か月程度かかります。

- ・ 里帰り出産で市外に滞在中
- ・ 市外の病院に入院中

※手続きの詳細は、横浜市ホームページ「市外の医療機関で予防接種を受ける場合」に掲載していますので、ご確認ください。

イ 接種当日

- (ア) 朝からお子さんの状態をよく観察し、普段と変わらないことを確認してください。接種を受ける予定となっても、体調が悪いと思ったらかかりつけ医に相談のうえ、接種するかどうか判断しましょう。
- (イ) 自宅でお子さんの体温を測り、平熱であることを確かめてください。少しでも体調の悪いときは、次の機会に延ばしましょう。
- (ウ) 予防接種を受ける医療機関には、お子さんの日ごろの健康状態をよく知っている保護者の方がお連れください。

やむを得ない理由で保護者が同伴できず、祖父母等が同伴する場合は「委任状」が必要です。接種を受けるお子さんの健康状態を普段より熟知し、医師の質問に答えられる方が同伴してください。様式(例)は29ページをご参照ください。様式(例)に記載の項目が全て記載されていれば様式は問いません。

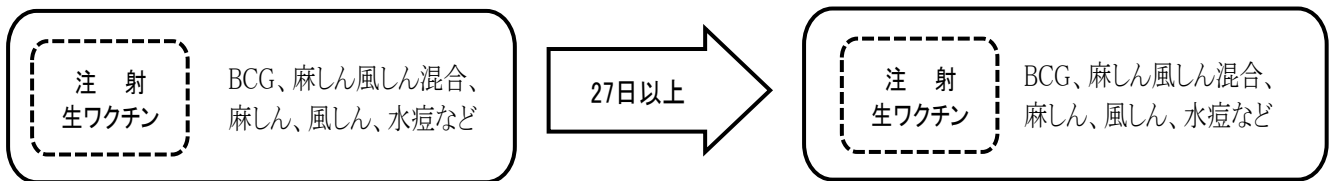
※予防接種法上、「保護者」とは親権を行う者又は後見人を指します。

- (エ) 予診票は、接種医への大切な情報です。責任を持って詳しくご記入ください。特に、最近受けた予防接種、アレルギーなどをご確認ください。
- (オ) 母子健康手帳、住所が確認できる書類（健康保険証等）、予診票(接種券)を必ずお持ちください。

ウ その他

- (ア) 接種後、まれに副反応が起きることがあります。具合が悪くなったときはすぐに接種医等の診察を受けてください。
- (イ) 予防接種を安全かつ効果的に接種するために、注射による生ワクチンを接種する場合、注射による生ワクチンを接種した日から27日以上の間隔が必要です。
「次に受ける予防接種まで27日以上間隔をあける」とは、**接種当日を0日とするため**、例えば、1日（月曜日）に接種した場合、次の接種は、29日（月曜日）（4週後の同じ曜日）以降となります。

■異なる種類のワクチンを接種する場合の間隔



注1 同じ種類のワクチンを何回か接種する場合には、それぞれ定められた間隔がありますので、ご注意ください。

注2 医師が必要と認めた場合には、異なる種類のワクチンを同時に（接種部位は別々に）接種を行うことができます。同時接種については、接種を受ける前に、接種医にご相談ください。

- (ウ) 感染症にかかった場合には、全身状態の改善を待って、接種してください。なお、接種については、免疫状態の回復を考え、以下の間隔を目安に空けてください。ただし、接種の実施は接種医が判断しますので、接種の際はあらかじめ医師にご相談ください。

かかった疾病	間 隔
突発性発疹、手足口病、伝染性紅斑(りんご病)など	⇒ 治ってから1～2週間程度
風しん、みずぼうそう(水痘)、おたふくかぜ(流行性耳下腺炎) など	⇒ 治ってから2～4週間程度
麻しん(はしか)	⇒ 治ってから4週間程度

5 予防接種後の注意

(1) 一般的注意事項

- ア 接種後30分間は、医療機関でお子さんの様子を観察するか、医師とすぐに連絡をとれるようにしておきましょう。急な副反応がこの間に起こることがあります。
- イ 接種後、生ワクチン（麻しん風しん混合、麻しん単独、風しん単独、BCG、水痘、ロタウイルスなど）では4週間、不活化ワクチン（五種混合、四種混合、二種混合、ポリオ、日本脳炎、小児用肺炎球菌、B型肝炎、子宮頸がん予防など）では1週間は副反応の出現に注意しましょう。
- ウ 接種部位は清潔に保ちましょう。入浴は可能ですが、接種部位をこすりはやめましょう。
- エ 接種当日は、激しい運動を避けてください。
- オ 接種後、接種部位の異常な反応や体調の変化があった場合はすみやかに医師の診察を受けましょう。

(2) 接種後にみられることがある一般的な症状

予防接種を受けたあと、次のような症状が現れることがあります。**症状が異常に強い場合や、そのほか異常な症状があった場合には、すみやかに医師の診察を受けましょう。**

より詳しい副反応については、

「8 予防接種の対象となる感染症と予防接種による副反応」をご覧ください。(10~26 ページ各頁)

ワクチン名	予防接種後、みられることがある主な症状
小児用肺炎球菌	接種後、接種部位の症状（赤み、腫れ、痛みなど）や発熱などがみられることがありますが、通常は数日で消失します。
B型肝炎	接種後、接種部位の症状（赤み、硬結（しこり）、腫れ、痛みなど）や発熱などがみられることがありますが、通常は数日で消失します。
ロタウイルス感染症	接種後、約1~2週間の間は、腸重積症のリスクが通常より高まるとする研究報告もありますので、「突然はげしく泣く」、「機嫌が良かったり不機嫌になったりを繰り返す」、「嘔吐する」、「血便が出る」、「ぐったりして顔色が悪い」といった症状が一つでも見られた場合や、いつもと様子が違う場合は速やかに医療機関を受診してください。
五種混合（DPT-IPV-Hib） 四種混合（DPT-IPV） 二種混合（DT）	接種後、接種部位の症状（赤み、硬結（しこり）、腫れ、痛みなど）や発熱などがみられることがありますが、通常は数日で消失します。 また、接種部位の小さな硬結（しこり）は、縮小しながらも数か月持続することがあります。
不活化ポリオ	接種後、接種部位の症状（赤み、腫れ、痛みなど）や発熱などがみられることがありますが、通常は数日で消失します。
Hib（ヒブ）	接種後、接種部位の症状（赤み、硬結（しこり）、腫れ、痛みなど）や発熱などがみられることがありますが、通常は数日で消失します。
日本脳炎	接種後、接種部位の症状（赤み、腫れ、痛みなど）や発熱などがみられることがありますが、通常は数日で消失します。
BCG	接種後10日後から針のあとに小さな発赤、ふくらみができ、化膿することがありますが（接種後1か月が最も強い）、やがて、かさぶたが生じ、3か月頃には自然によくなり、小さな針あとが残ります。
麻しん風しん混合（MR）	接種後、5~14日の間に発熱、発しん、注射部位の発赤、鼻汁、せきなどの症状が現れることがありますが、通常は数日で消失します。
水痘	副反応はほとんど認められませんが、時に発熱、発しんがみられ、まれに局所の赤み、腫れ、硬結（しこり）がみられます。
子宮頸がん予防	接種部位の疼痛、発赤（紅斑）、腫脹の頻度が高いワクチンです。 痛み等の頻度が高いワクチンであり、接種の痛みや緊張のために、血管迷走神経反射が出現し、失神することがあります。接種後は少なくとも30分間は背もたれのある椅子に座っていただき、座位で様子をみてください。前に倒れる場合がありますので注意して様子を観察してください。

6 ワクチンの種類と特徴

予防接種で使うワクチンには、次の3種類があります。

(1) 生ワクチン

対象：麻しん風しん混合（MR）ワクチン、麻しん及び風しん単独ワクチン、BCGワクチン、水痘ワクチン、ロタウイルスワクチンなど

生ワクチンは、生きた細菌やウイルスの病原性を限りなく弱くした（弱毒化した）もので、これを接種することによってその病気にかかった場合と同じように抵抗力（免疫）がつきます。

接種後から体内で病原性を弱めた細菌やウイルスの増殖が始まることから、それぞれのワクチンの性質に応じて、発熱や発しんの軽い症状が出ることがあります。十分な抵抗力がつくのに約1か月が必要です。

(2) 不活化ワクチン

対象：五種混合ワクチン、四種混合ワクチン、二種混合ワクチン、不活化ポリオワクチン、乾燥細胞培養日本脳炎ワクチン、Hib（ヒブ）ワクチン、小児用肺炎球菌ワクチン、B型肝炎ワクチン、子宮頸がん予防ワクチンなど

不活化ワクチンは、細菌やウイルスを殺し抵抗力をつくるのに必要な成分を取り出して病原性をなくしてつくったものです。この場合、体内で細菌やウイルスは増殖しないため、複数回接種することによって、抵抗力をつけます。一定の間隔で2～3回接種し、最小限必要な抵抗力をつけたあと、約1年後に追加接種をして十分な抵抗力をつけます。

しかし、しばらくすると少しずつ抵抗力が低下してしまいますので、長期に抵抗力を保つためには、それぞれのワクチンの性質に応じて一定の間隔で追加接種を受けることが必要です。

(3) トキソイド

対象：ジフテリアトキソイド、破傷風トキソイド

トキソイドとは、細菌がつくる毒素を取り出し、その毒性をなくしたものです。基本的には不活化ワクチンと同様で、何回かの接種で抵抗力をつけます。

7 予防接種の有効性

予防接種は、その病気にかからないようにすることを目的としていますが、お子さんの体質、そのときの体調などによって抵抗力がつかないこともあります。抵抗力がついたかどうかを知りたい場合には、採血により、血中の抗体を測定する方法もあります（費用は自己負担）。

8 予防接種の対象となる感染症と予防接種による副反応

肺炎球菌感染症

ア 病気の説明

肺炎球菌は、細菌による子どもの感染症の二大要因のひとつです。この菌は子どもの多くが鼻の奥に保菌していて、ときに細菌性髄膜炎、菌血症、肺炎、副鼻腔炎、中耳炎といった病気を起こします。

肺炎球菌による化膿性髄膜炎の罹患率は5歳未満人口10万対2.6～2.9とされ、年間150人前後が発症していると推定されていました(*)。死亡率や後遺症例(水頭症、難聴、精神発達遅滞など)はヒブによる髄膜炎より高く、約21%が予後不良とされています。

* 厚生科学審議会感染症分科会予防接種部会の資料による。

イ 予防接種の方法

小児用肺炎球菌の予防接種は、初回接種を開始した月齢ごとに次の方法により行います。下記の①の方法を標準的な接種方法とします。

標準スケジュール

① 生後2か月～7か月未満に接種を開始した場合

27日以上の間隔で3回接種し、3回目の接種後60日以上の間隔で、生後12か月以降に1回追加接種をします。(追加接種は生後12～15か月を標準とします。)

※初回2回目及び3回目の接種は、生後24か月未満までに行います。(生後24か月を超えた場合は残りの初回接種を行わず、追加接種を1回のみ行います。また、生後12か月を超えて初回2回目を接種した場合は、初回3回目の接種は行わず、上記の間隔で、追加接種を1回のみ行います。)

標準スケジュールから外れた場合

② 生後7か月～12か月未満に接種を開始した場合

27日以上の間隔で2回接種し、2回目の接種後60日以上の間隔で、生後12か月以降に1回追加接種をします。

※初回2回目の接種は、生後24か月未満までに行います。(生後24か月を超えた場合は残りの初回接種を行わず、追加接種を1回のみ行います。)

③ 生後12か月～24か月未満に接種を開始した場合

60日以上の間隔で2回接種をします。(予診票は、初回1回目及び追加分の使用を推奨)

④ 生後24か月～5歳未満に接種を開始した場合

1回接種をします。(予診票は、追加分の使用を推奨)

◇接種をおすすめする年齢と無料で受けられる年齢

① 接種をおすすめする年齢
(標準の接種年齢/丸数字は何回目の接種かを表します。)

無料で受けられる年齢
(法律で定められている接種対象年齢)

年齢	生後																										
	2か月	3か月	5か月	6か月	8か月	9か月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳	
予防接種名																											
小児用肺炎球菌	①	②	③																								

※接種開始月齢によって、接種回数異なります。
(標準スケジュールから外れた場合の接種方法は、上記の接種方法を参照)

ウ ワクチンの副反応

副反応としては、接種部位の赤み・腫れ・硬結(しこり)・痛み、発熱などがみられることがあります。

B型肝炎

ア 病気の説明

B型肝炎ウイルスに感染すると、急性肝炎となりそのまま回復する場合もあれば、慢性肝炎となる場合もあります。一部では劇症肝炎といって、激しい症状から死に至ることもあります。また、症状がないままウイルスが肝臓内部に潜み、年月を経て慢性肝炎・肝硬変・肝がんなどになることがあります。特に年齢が低いほど、急性肝炎の症状は軽いかあるいは無症状な一方、ウイルスがそのまま潜んでしまう持続感染の形をとりやすいことが知られています。感染は、肝炎ウイルス（HBs抗原）陽性の母親から生まれた新生児、肝炎ウイルス陽性の血液や体液に直接接触した場合、肝炎ウイルス陽性者との性的接触などで生じます。

イ 予防接種の方法

B型肝炎の予防接種は、27日以上の間隔で2回（標準的には生後2か月、3か月）接種し、さらに、**1回目の接種から**139日以上の間隔をおいて（*）1回（標準的には生後7～8か月）の計3回接種をします。

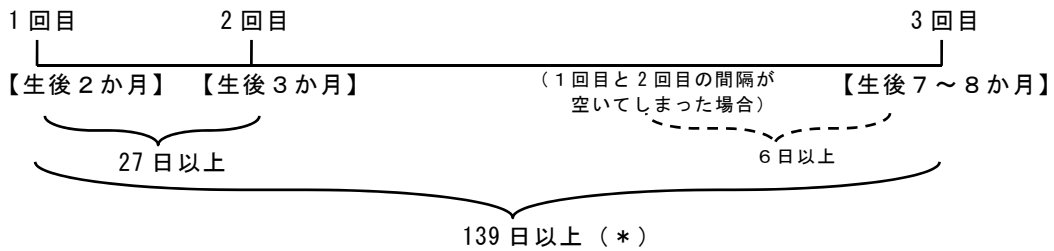
※HBs抗原陽性の妊婦から生まれたお子さんで、母子感染予防のためにB型肝炎ワクチンの接種を受けている場合は、定期予防接種の対象外となります。引き続き、健康保険の適用によるワクチン接種を受けてください。

標準スケジュール（標準的な接種年齢は、生後2か月、生後3か月、生後7～8か月）

1回目、2回目： 1回目を接種したのち、27日以上の間隔をおいて2回目を接種します。

3回目： **1回目の接種から**139日以上の間隔をおいて（*）、3回目を接種します。

【注意】1回目の接種から3回目の接種までには、おおよそ半年間を要します。
スケジュールをよくご確認ください。



*「139日以上の間隔をおいて」…20週後の同じ曜日から接種可能となります。

※B型肝炎のワクチンは2種類あり、基本的には3回の接種を同一のワクチンで行うことが望ましいと考えられています。ただし、切り替えて接種する場合でも、定期接種としての実施は可能です。なお、切り替えて使用した場合の有効性及び安全性については、厚生労働省の研究結果で、有用性が確認されています。

◇接種をおすすめする年齢と無料で受けられる年齢

① 接種をおすすめする年齢（標準の接種年齢/丸数字は何回目の接種かを表します。）

無料で受けられる年齢（法律で定められている接種対象年齢）

年齢	生後																										
	2か月	3か月	5か月	6か月	8か月	9か月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳	
予防接種名																											
B型肝炎	①	②																									
							③																				

【注意】
1回目の接種から3回目の接種を終えるまで、おおよそ半年間を要します。

ウ ワクチンの副反応

副反応としては、接種部位の赤み・腫れ・硬結（しこり）・痛み、発熱、倦怠感、頭痛などがみられることがあります。

また、極めてまれですが、重い副反応として、アナフィラキシーや急性散在性脳脊髄炎（ADEM）が報告されています。

ロタウイルス胃腸炎

ア 病気の説明

ロタウイルスは、世界のどこでもみられる、主に5歳未満の乳幼児に多くみられる急性胃腸炎の原因ウイルスです。主な症状は下痢・嘔吐・発熱などで、ときに脱水、けいれん、肝機能異常、腎不全を、まれですが、急性脳症等を合併することがあります。年齢にかかわらず、何度でも感染発病しますが、乳児期での初感染が最も重症で、その後感染を繰り返すにつれて軽症化していきます。

そのため、最初の感染を防ぐことを最大の目的として乳児早期にワクチン接種を行います。

イ 予防接種の方法

ロタウイルス予防接種は、ワクチンが2種類あります。2つのワクチンに予防効果や安全性に差はありませんが、接種回数が異なりますので、他のワクチンとの接種スケジュールなどを考慮し、かかりつけ医とご相談のうえ、いずれかのワクチンを接種してください。なお、途中からワクチンの種類を変更することは原則できませんので、最初に接種したワクチンを2回目以降も接種してください。

1回目の接種は、両ワクチンともに、**生後2か月から出生14週6日後まで**に接種します。

(週齢が高くなるにつれ自然発症による腸重積症のリスクが増加しますので、出生14週6日後を越えての初回接種はおすすめしません。)

2回目以降の接種については、ロタリックス【1価】は、1回目接種後、27日以上の間隔をおいて、残り1回を接種(**出生24週0日後まで**)します。ロタテック【5価】は、1回目接種後、それぞれ27日以上の間隔をおいて残り2回を接種(**出生32週0日後まで**)します。

なお、ロタリックス【1価】は出生24週0日後を超えた乳幼児に接種した時、また、ロタテック【5価】は出生32週0日後を超えた乳幼児に接種した時、有効性・安全性についての情報はありません。遅くともロタリックス【1価】は出生24週0日まで、また、ロタテック【5価】は出生32週0日までに接種を完了させてください。

※ワクチンがうまく飲めなかったり、吐いたりしてしまった場合でも、わずかでも飲み込みが確認できていれば、ワクチンの効果に問題ありませんので、再度接種する必要はありません。

※このワクチンは、ロタウイルス胃腸炎の発症を7～8割減らし、入院するような重症例に限ればほとんど予防できます。ただし、ロタウイルス以外の原因による胃腸炎には予防効果は示しません。

◇接種をおすすめする年齢と無料で受けられる年齢

年齢	① 接種をおすすめする年齢 (標準の接種年齢/丸数字は何回目の接種かを表します。)					無料で受けられる年齢 (法律で定められている接種対象年齢)						
	出生6週0日後	生後2か月	出生14週6日後	出生24週0日後	出生32週0日後	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳
予防接種名												
ロタウイルス	【ロタリックス(1価)】 ① ② 【ロタテック(5価)】 ① ② ③					どちらも、1回目を、生後2か月から出生14週6日後までに接種。 2回目以降は、27日以上の間隔をあけて接種。						

◆ 「出生〇週〇日後」の考え方 ◆

生まれた日の翌日から起算して、生まれた日の翌日が「出生0週1日後」になります。また、「出生6週0日後から」や「出生14週6日後まで」とは、「出生6週0日後」、「出生14週6日後」の日を含みます。具体的な例は以下のとおりです。

出生6週0日後 : 生まれてから 6回目の、生まれた日と同じ曜日

出生14週6日後 : 生まれてから 15回目の、生まれた日と同じ曜日の1日前

出生24週0日後 : 生まれてから 24回目の、生まれた日と同じ曜日

出生32週0日後 : 生まれてから 32回目の、生まれた日と同じ曜日

ウ 接種前の注意

赤ちゃんのお腹がいっぱいと、上手にワクチンが飲めない場合がありますので、接種前 30 分ほどは授乳を控えることをおすすめします。上手に飲めるよう、医師、看護師の指示に従ってください。

エ 接種後の注意

接種当日の重い副反応としてまれにアナフィラキシー症状（ワクチンへのアレルギーによる発疹、呼吸困難など）が起こる可能性があるため十分な観察を行ってください。接種を受けてから約 1～2 週間の間は、腸重積症のリスクが通常より高まるとする研究報告もあります。

腸重積症の症状としては、「突然はげしく泣く」、「機嫌が良かったり不機嫌になったりを繰り返す」、「嘔吐を繰り返す」、「血便が出る」、「ぐったりして顔色が悪い」などがあります。これらの症状が一つでも見られた場合や、いつもと様子が違う場合は速やかに医療機関を受診させてください。接種した医療機関とは別の医療機関を受診する場合は、このワクチンを接種したことを医師に伝えてください。

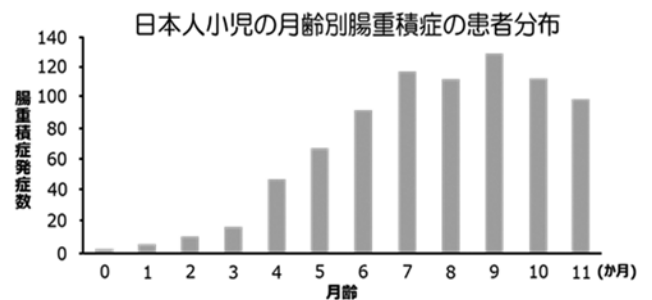
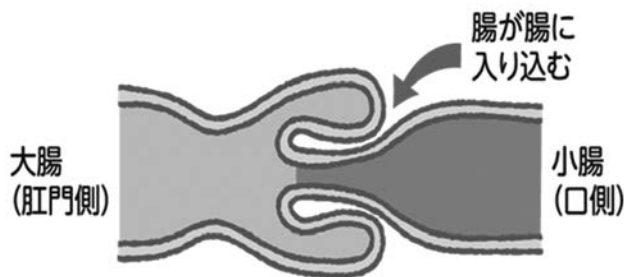
ワクチン接種後 2 週間ほどは、赤ちゃんの便の中に、ワクチンのウイルスが含まれることがあります。おむつ交換の後などは、ていねいに手を洗ってください。

オ 腸重積症について

腸重積症とは、腸が腸に入り込み、閉塞状態になることです（下図参照）。

0 歳児の場合、ロタウイルスワクチンを接種しなくても起こる病気で、もともと、3～4 か月齢ぐらいから月齢が上がるにつれて多くなります（下のグラフ参照）。

早めに接種を開始し、規定回数接種することをおすすめします。



腸重積症は、手術が必要になることもありますが、発症後、早期に治療すれば、ほとんどの場合、手術をせずに治療できます。

BCG（結核）

ア 病気の説明

結核菌の感染で起こります。わが国では、まだ約1.2万人の患者が毎年発生しているため、大人から子どもへ感染することも少なくありません。また、結核に対する抵抗力（免疫）は、お母さんからもらうことができないので、生まれたばかりの赤ちゃんも結核にかかる心配があります。乳幼児は結核に対する抵抗力（免疫）が弱いので、全身性の結核症にかかったり、結核性髄膜炎になることもあり、重い後遺症を残す可能性があります。

BCGは、重症になりやすい乳幼児期の結核を防ぐ効果が確認されているので、生後5か月に達したら、なるべく早くBCG接種を受けましょう。また、周りに結核患者がいて感染が疑われる場合は、接種を受ける前にお住まいの区の区役所福祉保健課健康づくり係（30ページ参照）にご相談ください。

イ 予防接種の方法

標準的な接種期間として、生後5か月から8か月の間に1回接種します。これを過ぎてしまった場合には、1歳までに接種を行います。

BCGの接種方法は管針法といって、スタンプ方式で上腕の2か所に押し付けて接種します。接種部位は日陰で10分程度乾かします。

◇接種をおすすめする年齢と無料で受けられる年齢

①

接種をおすすめする年齢

（標準の接種年齢/丸数字は何回目の接種かを表します。）

無料で受けられる年齢

（法律で定められている接種対象年齢）

年齢	生後																						
	3 か 月	6 か 月	9 か 月	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	13 歳	14 歳	15 歳	16 歳	17 歳	18 歳	19 歳	
予防接種名																							
BCG			①																				

ウ ワクチンの副反応

- 接種後10日ごろに接種部位に赤いポツポツができ、一部に小さい膿ができることがあります。この反応は接種後4週間ごろに最も強くなりますが、その後、かさぶたができて、接種後3か月頃までには、接種のあとが残るだけになります。これは異常反応ではなく、BCG接種により抵抗力（免疫）がついた証拠です。自然に治るので包帯をしたり、バンソウコウを貼ったりせず、そのまま清潔に保ってください。ただし3か月以上経過しても接種のあとがジクジクしているようなときは医師にご相談ください。
- 接種した側のわきの下のリンパ節がまれに腫れることがあります。通常はそのまま様子を見ていけば治りますが、大きく腫れたり、化膿して自然に破れて膿が出る場合、接種部位がただれたりした場合は、医師にご相談ください。
- まれではありますが、重大な副反応として、ショック、アナフィラキシー、全身播種性BCG感染症、骨炎・骨髄炎・骨膜炎、皮膚結節様病変があげられます。

～特にご注意いただきたい症状「コッホ現象」～

接種後早期、1週間～10日以内（多くの場合は3日以内）に、接種部位が赤くなったり、腫れたり、針痕が化膿する強い反応が出る場合があります、この反応を「コッホ現象」といいます。

「コッホ現象」と思われる反応があった場合、結核に感染していないか検査する必要がありますので、接種した医療機関またはお住まいの区の区役所福祉保健課健康づくり係（30ページ参照）にご連絡ください。

ジフテリア・百日せき・破傷風・ポリオ・ヒブ

五種混合：四種混合（ジフテリア・百日せき・破傷風・ポリオ）＋ヒブ （令和6年4月～）

四種混合：三種混合（ジフテリア・百日せき・破傷風）＋不活化ポリオ （平成24年11月～）

四種混合ワクチンで接種を開始したお子さんは、原則残りの接種も四種混合を接種してください。

また、三種混合ワクチンの接種が完了していて、ポリオワクチンの接種が完了していないお子さんは単独の不活化ポリオワクチンを接種してください。

ア 病気の説明

(7) ジフテリア (Diphtheria)

ジフテリア菌の飛沫感染で起こります。

ワクチン接種により、現在では国内の患者発生数は年間0が続いていますが、アジア地域では時折流行的発生がみられています。

感染は主に喉ですが、鼻腔内にも感染します。ジフテリアは感染しても10%程度の人に症状が出るだけで、残りの人は症状が出ない保菌者となり、その人を通じて感染することもあります。

症状は高熱、のどの痛み、犬吠様のせき（ケンケンという犬がほえるようなせき）、嘔吐などで、偽膜と呼ばれる膜ができて窒息死することもあります。発病2～3週間後に菌の出す毒素によって、心筋障害や神経麻痺を起こすことがあるため注意が必要です。

(4) 百日せき (Pertussis)

百日せき菌の飛沫感染で起こります。

百日せきワクチンの接種がはじまって以来、患者数は減少してきていますが、最近、長びくせきの特徴とする学童から思春期、成人の百日せきがみられ、乳幼児への感染源となり、特に新生児・乳児が重症化することがあるので注意が必要です。

百日せきは普通のかぜのような症状で始まります。続いて咳がひどくなり、顔を真っ赤にして連続的にせき込むようになります。せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹くような音が出ます。通常、熱は出ません。乳幼児はせきで呼吸ができず、くちびるが青くなったり（チアノーゼ）、けいれんが起きることがあります。乳児では肺炎や脳症などの重い合併症を起こし、命を落とすこともあります。

(ウ) 破傷風 (Tetanus)

破傷風菌はヒトからヒトへと感染するのではなく、土の中にいる菌が傷口からヒトの体内に入ることによって感染します。菌が体の中で増えると、菌の出す毒素のために、筋肉の強直性けいれんを起こします。最初は口が開かなくなる症状で気付かれ、やがて全身のけいれんを起こすようになり、治療が遅れると死に至ることもある病気です。患者の半数は本人や周りの人では気づかない程度の軽い刺し傷が原因で感染しています。土の中に菌がいるため、感染する機会は常にあります。

(イ) ポリオ (Polio)

ポリオは、かつては「小児まひ」とも呼ばれ、わが国でも1960年代前半までは大流行を繰り返していました。予防接種の効果で、国内での自然感染は報告されていません。

しかし、現在でもパキスタン、アフガニスタンなどの国では野生株ポリオウイルスによるポリオの発生があることから、これらの地域で日本人がポリオに感染したり、日本にポリオウイルスが入ってくる可能性があります。

口から入ったポリオウイルスは、のど又は腸で増殖します。腸の細胞ではウイルスは4～35日間増殖したウイルスは便中に排泄され、再びヒトの口に入り抵抗力（免疫）を持っていないヒトの腸内で増殖し、ヒトからヒトへ感染します。

感染してもほとんどの場合は無症状ですが、5%くらいに、のどの痛み、発熱などのかぜ様症状がみられます。また、感染した人の1～2%は無菌性髄膜炎を発症しますが、2～10日で軽快します。

しかし、感染者の約1,000～2000人に1人は、麻痺を起こし、後遺症として運動障害を残す場合があります。ときに、呼吸不全を起こして死亡することもあります。

(オ) ヒブ (Hib)

インフルエンザ菌、特にb型 (Hib) は、中耳炎、副鼻腔炎、気管支炎などのほか、髄膜炎、敗血症、喉頭が炎、肺炎などの重篤な全身感染症を起こす原因となります。Hib (ヒブ) による髄膜炎は2010年以前は、5歳未満人口10万対7.1～8.3とされ、国内では年間約400人が発症し、約11%が予後不良と推定されていました(*)。生後4か月～1歳までの乳児が過半数を占めていました。現在は、Hibワクチンが普及し、侵襲性インフルエンザ菌感染症はほとんどみられなくなりました。*厚生科学審議会感染症分科会予防接種部会の資料による。

イ 五種混合・四種混合ワクチンの予防接種の方法

1期は、五種混合ワクチンまたは四種混合ワクチン、2期は、二種混合ワクチン (ジフテリア・破傷風) を使用し、以下のとおり接種します。回数が多いので接種漏れに注意しましょう。

(7) 1期初回接種及び追加接種

1期として、生後2か月～90か月未満の間に初回接種3回 (20日～56日の間隔をあけて)、追加接種1回 (初回接種3回終了後、五種混合は6か月～18か月、四種混合は12か月～18か月を経過した時期) の計4回、ワクチンを接種します。

※ 四種混合は、事情により接種を急ぐ場合の追加接種は初回接種終了後6か月以上の間隔をあけて行います。

(4) 2期接種

2期として11歳～13歳未満の間に1回、二種混合ワクチンを接種します。

◇接種をおすすめする年齢と無料で受けられる年齢

① 接種をおすすめする年齢 (標準の接種年齢/丸数字は何回目の接種かを表します。)
 無料で受けられる年齢 (法律で定められている接種対象年齢)

五種混合のスケジュール

年齢	生後	月																	
		2	3	6	9	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
予防接種名	年齢	か	か	か	か	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳
五種混合	1期	①	②	③			④												
二種混合	2期																	①	

四種混合のスケジュール

四種混合	1期初回	①	②	③															
	1期追加						④												
二種混合	2期																	①	

ウ 五種混合・四種混合ワクチンの副反応

五種混合・四種混合ワクチンの主な副反応は、接種部位の赤み、腫れ、硬結 (しこり) など、接種部位以外の副反応として、発熱、気分変化、鼻汁、せき、発疹、食欲減退、喉の発赤、嘔吐などが報告されています。

また、重大な副反応ではショック、アナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、脳炎、けいれんなどが報告されています。

エ Hib（ヒブ）ワクチンの予防接種の方法（四種混合＋ヒブで打つ場合）

Hib（ヒブ）の予防接種は、初回接種を開始した月齢ごとに次の方法により行います。（ア）の方法を標準的な接種方法とします。

標準スケジュール

(ア) 生後2か月～7か月未満に接種を開始した場合

27日～56日（医師が特に必要と認めた場合は20日）の間隔で3回接種し、3回目の接種後7か月～13か月の間に1回追加接種をします。

※初回2回目及び3回目の接種は、生後12か月未満までに行います。

（生後12か月を超えた場合は残りの初回接種を行わず、最後に接種した初回接種終了後、27日以上の間隔で、追加接種を1回のみ行います。）

標準スケジュールから外れた場合

(イ) 生後7か月～12か月未満に接種を開始した場合

27日～56日（医師が特に必要と認めた場合は20日）の間隔で2回接種し、2回目の接種後7か月～13か月の間に1回追加接種をします。

※初回2回目の接種は、生後12か月未満までに行います。

（生後12か月を超えた場合残りの初回接種を行わず、最後に接種した初回接種終了後、27日以上の間隔で、追加接種を1回のみ行います。）

(ウ) 生後12か月～5歳未満に接種を開始した場合

1回接種をします。（予診票は、追加分の使用を推奨）

◇接種をおすすめする年齢と無料で受けられる年齢

①	接種をおすすめする年齢 (標準の接種年齢/丸数字は何回目の接種かを表します。)		無料で受けられる年齢 (法律で定められている接種対象年齢)
---	--	--	----------------------------------

年齢	生後																								
	2か月	3か月	5か月	6か月	8か月	9か月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳
予防接種名																									
Hib(ヒブ)	初回	①②③																							
	追加						④																		

※接種開始月齢によって、接種回数異なります。
(標準スケジュールから外れた場合の接種方法は、上記の接種方法を参照)

オ ヒブワクチンの副反応

副反応としては、接種部位の赤み・腫れ・硬結（しこり）・痛み、不機嫌、不眠、食思不振、下痢、発熱などがみられることがあります。

麻しん、風しん

ア 病気の説明

(ア) 麻しん（はしか）（Measles）

麻しんウイルスの空気感染、飛沫感染や接触感染によっておこります。ウイルスに感染後、無症状の時期（潜伏期間）が約10～12日続きます。その後、発熱、せき、鼻汁、めやに、発しんなどの症状がでます。症状が出始めてから3～4日は38℃前後の熱とせきと鼻汁、めやにが続き、一時熱が下がりかけたかと思うと、また39～40℃の高熱となり、首すじや顔などから出始めた発しんが、その後全身に広がります。高熱は3～4日で解熱し、次第に発しんも消失しますが、しばらく色素沈着が残ります。

主な合併症として、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎などがあり、発生する割合は麻しん患者100人中、中耳炎は約7～9人、肺炎は約6人です。脳炎は約1,000人に1～2人の割合で発生します。

また、麻しんにかかると、数年から10数年経過した後に亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という重い脳炎を発症することがあり、麻しん患者約10万人に1～2人の割合でおこります。麻しんにかかった人のうち、数百人に1人程度の割合で死亡することがあります。

(イ) 風しん（Rubella）

風しんは、風しんウイルスの飛沫感染によっておこります。ウイルスに感染後、無症状の時期（潜伏期間）が約2～3週間続きます。その後、発しん、発熱、首のうしろのリンパ節が腫れるなどが主な症状として現れます。また、そのほかに、せき、鼻汁、目が赤くなる（眼球結膜の充血）などの症状が見られることもあります。合併症として、関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。血小板減少性紫斑病は風しん患者約3,000人に1人、脳炎は風しん患者約6,000人に1人ほどの割合で発生します。大人になってからかかると子どものときより重症化する傾向が見られます。

妊娠中の女性が風しんに感染すると、お腹の赤ちゃんにも感染し、耳が聞こえにくい、目が見えにくい、心臓に異常があるといった「先天性風しん症候群」になる可能性があります。

イ 予防接種の方法

平成18年4月1日に予防接種法施行令が改正され、麻しん風しん混合（MR）ワクチンによる 2回接種 となりました。

(ア) 1期接種

生後12か月～24か月未満の間に、麻しん風しん混合（MR）ワクチンを1回接種します。なお、麻しん及び風しん単独ワクチンの接種を希望する場合は、単独ワクチンを27日以上の間隔をあけて各1回接種します。

(イ) 2期接種

小学校入学1年前の4月1日～入学する年の3月31日までの間（いわゆる幼稚園・保育園の年長児）に麻しん風しん混合（MR）ワクチンを1回接種します。なお、麻しん及び風しん単独ワクチンの接種を希望する場合は、単独ワクチンを27日以上の間隔をあけて各1回接種します。

◇接種をおすすめする年齢

① 接種をおすすめする年齢 ※無料で受けられる年齢も同じ期間となります。
(標準の接種年齢/丸数字は何回目の接種かを表します。)

年 齢	生 後																						
	3 か 月	6 か 月	9 か 月	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	13 歳	14 歳	15 歳	16 歳	17 歳	18 歳	19 歳	
麻しん、風しん混合																							
1 期				①																			
2 期									★①														

★5歳～7歳未満で小学校入学1年前の4月1日から入学する年の3月31日までの間に接種してください。

ウ ワクチンの副反応

(7) 麻しん風しん混合 (MR) ワクチン

主な副反応は、発熱と発しんです。これらの症状は、接種後5～14日の間に多く見られます。接種直後から翌日に過敏症状と考えられる発熱、発しん、掻痒（かゆみ）などがみられることがあります。これらの症状は通常1～3日でおさまります。ときに、接種部位の赤み、腫れ、硬結（しこり）、リンパ節の腫れ等が見られることがあります。いずれも一過性で通常数日中に消失します。

まれに生じる重い副反応としては、ショック、アナフィラキシー、急性血小板減少性紫斑病、脳炎及びけいれんなどが報告されています。

(イ) 麻しん単独ワクチン

主な副反応としては、接種後5～14日を中心として、37.5℃以上38.5℃未満の発熱（接種した者のうち約5%前後）、38.5℃以上の発熱（接種した者のうち約8%前後）、麻しん様の発しん（接種した者のうち約6%前後）が見られます。ただし、発熱の期間は通常1～2日で、発しんは少数の紅斑や丘しんから、自然麻しんに近い場合などさまざまです。その他、接種した部位の発赤、腫れ、熱性けいれん（約300人に1人）、じんましんなどが認められることがありますが、いずれもそのほとんどは一過性です。

まれに生じる重い副反応としては、ショック、アナフィラキシー、脳炎脳症（100～150万人接種当たり1人以下）、急性血小板減少性紫斑病（100万人接種当たり1人程度）が知られています。

(ウ) 風しん単独ワクチン

主な副反応としては、発しん、じんましん、紅斑、掻痒（かゆみ）、発熱、リンパ節の腫れ、関節痛などが認められています。

まれに生じる重い副反応としては、ショック、アナフィラキシーがあり、また、急性血小板減少性紫斑病（100万人接種当たり1人程度）が報告されています。

◆ 飛沫感染

ウイルスや細菌が、咳やくしゃみなどにより、細かい唾液や気道分泌物に包まれて空気中に飛び出し、約1～2mの範囲で人に感染することです。

◆ 空気感染

ウイルスや細菌が空気中に飛び出し、空気を介して人に感染することです。麻しん（はしか）、水痘、結核が空気感染します。

◆ 接触感染

皮膚同士の接触、または手すりなどの物体表面を介した間接的な接触で病原体が皮膚に付着し、感染が成立するものです。

◆ 潜伏期間

ウイルスや細菌などの病原体が感染してから、症状が出るまでの期間をいいます。

水痘

ア 病気の説明

水痘（水ぼうそう）は、水痘・帯状疱疹ウイルスの直接接触、飛沫感染あるいは空気感染によって感染します。潜伏期は 10～20 日、通常 13～17 日です。発しんは、最初は丘しんで、水疱、膿疱、痂皮（かさぶた）へと移行します。発しんは体幹に多く出現する傾向がありますが、頭髪部にも出現します。時に軽度の発熱を伴うこともあります。一般に軽症疾患ですが、白血病や治療により免疫機能が低下している患者さんでは重症となります。

イ 予防接種の方法

生後 12 か月～36 か月未満の間に、初回接種 1 回、初回接種終了後、3 か月以上（標準は 6～12 か月）の間隔をおいて追加接種 1 回の計 2 回、水痘ワクチンを接種します。

◇接種をおすすめする年齢と無料で受けられる年齢

① 接種をおすすめする年齢
 （標準の接種年齢/丸数字は何回目の接種かを表します。）
 無料で受けられる年齢
 （法律で定められている接種対象年齢）

年齢	生後																
	3 か月	6 か月	9 か月	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	13 歳	14 歳
水痘 初回				①													
追加					②												

ウ ワクチンの副反応

副反応はほとんど認められませんが、時に発熱、発しんがみられ、まれに局所の赤み、腫れ、硬結（しこり）がみられます。

まれに生じる重い副反応としては、アナフィラキシー、急性血小板減少性紫斑病（100 万人接種当たり 1 人程度）が報告されています。

日本脳炎

ア 病気の説明

日本脳炎ウイルスの感染で起こります。ヒトから直接ではなく、ブタなどの体内で増えたウイルスが蚊によって媒介され感染します。7～10日の潜伏期間の後、高熱、頭痛、嘔吐、意識障害、けいれんなどの症状を示す急性脳炎になります。

日本での流行は西日本地域が中心ですが、ウイルスは日本全体に分布しています。飼育されているブタにおける日本脳炎の流行は、毎年6月～10月まで続きますが、この間に地域によっては約80%以上のブタが感染しています。以前は小児、学童に発生していましたが、予防接種の普及などで減少し、最近では予防接種を受けていない高齢者を中心に患者が発生しています。国外では、現在、インドなど南アジアや東南アジアで流行がみられます。

感染しても大多数は無症状で終わりますが、100～1000人に1人が脳炎を発症します。発症した場合、患者の死亡率は20～40%で、生存しても45～70%の人が麻痺などの後遺症を残します。

イ 予防接種の方法

乾燥細胞培養日本脳炎ワクチンを使用し、以下のとおり接種します。

原則として、2・3ページの表及び下記の表のとりの接種方法となりますが、平成17年の積極的勧奨の差し控えにより、接種を受けられなかった方のうち、生年月日が「平成17年4月2日～平成19年4月1日」の間の方は、救済措置※として、**20歳未満まで**は接種可能となっています。

救済措置の対象の方は、接種歴によって、接種方法が次の接種方法とは異なる場合がありますので、接種する前に横浜市予防接種コールセンターへ母子健康手帳（または接種記録のわかるもの）をご用意の上、お問い合わせください（30ページ参照）。

基本的な接種方法（1期：生後6か月～90か月未満 / 2期：9歳～13歳未満）

- (1) 「1期初回①」を接種後、6日～28日の間隔をあけて、「1期初回②」を接種します。
- (2) 「1期初回②」接種後、おおむね1年後に「1期追加」を接種します。
- (3) 「2期」を接種します。

※令和7年4月1日時点で、生年月日が「平成7年4月2日～平成17年4月1日」の方は既に20歳以上のため、救済措置の対象外となります。また、生年月日が「平成19年4月2日～平成21年10月1日」の間の方は、2期の接種期間中に、1期の未接種分を接種することが可能でしたが、令和4年10月時点で対象者が全員13歳以上となったため、措置は終了しました。

◇接種をおすすめする年齢と無料で受けられる年齢

①	接種をおすすめする年齢 (標準の接種年齢/丸数字は何回目の接種かを表します。)	□	無料で受けられる年齢 (法律で定められている接種対象年齢) (3歳未満は、接種量が半分にになります)
---	--	---	--

年齢 予防接種名	生後																							
	3か月	6か月	9か月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳	
日本脳炎																								
1期初回							①②																	
1期追加																								
2期																								

救済措置①(R7.4.1時点)
生年月日がH17.4.2～H19.4.1の間の方は、未接種分を20歳未満まで接種することが可能。

ウ ワクチンの副反応

発熱や接種部位の腫れや痛みなどの一般的な副反応が報告されています。また、極めてまれですが、重い副反応として、ショック、アナフィラキシー、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）、脳炎・脳症、けいれん、急性血小板減少性紫斑病が報告されています。なお、ADEMや脳炎・脳症の発症は日本脳炎ワクチンに特異的なものではありません。これらの発症の原因は、感染症の発症後やその他のワクチンの接種後、また、それ以外の場合もあります。

(参考：日本脳炎の積極的勧奨差し控え～現在の国の対応について)

時 期	内 容
平成 17 年 5 月	厚生労働省から勧告を受けて以降、積極的な勧奨を差し控え
平成 22 年 4 月	厚生労働省通知を受けて、3 歳の方のみ積極的な勧奨の再開
平成 22 年 8 月	厚生労働省令の公布により、乾燥細胞培養日本脳炎ワクチン(★)が 2 期の定期接種で使用可能なワクチンと位置づけられ、2 期の定期接種が実施可能となる。あわせて、2 期の対象者へ 1 期末接種分の救済措置（接種機会）開始
平成 23 年 4 月	厚生労働省通知を受けて、「3 歳」のほか、「4 歳」「9 歳」および「10 歳」の 1 期末接種者の方についても積極的な勧奨の再開
平成 23 年 5 月	厚生労働省令の公布により、接種が完了していない方のうち、生年月日が「平成 7 年 6 月 1 日～平成 19 年 4 月 1 日」の間の方に限り、救済措置として、20 歳未満まで対象年齢が拡大
平成 24 年 4 月	○厚生労働省通知を受けて、「3・4 歳」及び「9・10 歳の 1 期末接種者」に加え、「8 歳の 1 期末接種者」についても積極的な勧奨の再開 ○「平成 19 年 4 月 2 日～平成 21 年 10 月 1 日」の間の方は、2 期の接種期間中に 1 期の未接種分を接種可能となる。
平成 25 年 4 月	○厚生労働省通知を受けて、「3・4 歳」及び「8・9・10 歳の 1 期末接種者」に加え、「7 歳の 1 期末接種者」及び「18 歳の 2 期末接種者」についても積極的な勧奨の再開 ○厚生労働省令の公布により、救済措置の対象者が変更され、接種が完了していない方のうち、生年月日が「平成 7 年 4 月 2 日～平成 19 年 4 月 1 日」の間の方は、救済措置として、20 歳未満まで接種が可能となる。
平成 26 年 4 月	厚生労働省通知を受けて、「3・4 歳」に加え、「8 歳（平成 18 年度生まれ）・9 歳（平成 17 年度生まれ）の 1 期追加未接種者」及び「18 歳（平成 8 年度生まれ）の 2 期末接種者」についても積極的な勧奨の再開
平成 27 年 4 月	厚生労働省通知を受けて、「18 歳の 2 期末接種者」についても積極的な勧奨の再開
平成 28 年 4 月～現在	厚生労働省通知を受けて、「18 歳」に加え、「9 歳」についても積極的な勧奨の再開

(★) 乾燥細胞培養日本脳炎ワクチンについて

日本脳炎予防接種には、従来、マウス脳による製法のワクチンが使用されていましたが、新たなワクチンとして、乾燥細胞培養日本脳炎ワクチンが平成 21 年 2 月に薬事法に基づく承認を受け、同年 6 月に厚生労働省令の改正が行われ、定期接種の 1 期の予防接種に使用できるワクチンと位置づけられました。その後、平成 22 年 8 月の厚生労働省令の改正により、2 期の定期接種にも使用できるワクチンと位置づけられています。

子宮頸がん

子宮頸がん予防ワクチンは、子宮頸がんの主な原因とされるヒトパピローマウイルス（HPV）の感染を予防するワクチンです。

平成 25 年 4 月に定期予防接種に位置付けられましたが、接種後にワクチンとの因果関係を否定できない持続的な痛みなどの症状が報告されているとして、2 か月後の平成 25 年 6 月に厚生労働省は積極的な接種勧奨を差し控えるよう全国の自治体に勧告しました。この勧告を受け、横浜市でも対象者へ個別にご案内をお送りすることを取りやめました。

以降、8 年以上にわたり、積極的勧奨の差し控え（接種を積極的に勧めない）を行いました。その後、令和 3 年 11 月に、厚生労働省から、最新の知見を踏まえ、ワクチンの安全性に特段の懸念が認められないこと、接種による有効性が副反応のリスクを明らかに上回ることが認められることなどから、積極的勧奨の差し控えを終了し、対象者への個別勧奨を再開するよう全国の自治体に通知がありました。

横浜市でも、この通知を受け、令和 4 年度より、対象の方へのご案内を再開しています。

また、令和 5 年 4 月から従来の 2 価ワクチン、4 価ワクチンに加えて 9 価ワクチンが定期接種として使用するワクチンに追加されました。

なお、厚生労働省作成の最新のリーフレット等を横浜市ホームページ「子宮頸がん予防接種について」に掲載していますので、ご確認ください。

ア 病気の説明（参考：2025 年 2 月改定版 厚生労働省作成リーフレット）

○ 子宮頸がんの現状

子宮頸がんは、子宮のけい部という子宮の出口に近い部分にできるがんで、若い世代が発症する女性のがんの中で多くの割合を占めるがんです。日本では毎年、約 1 万人の女性がかかる病気で、患者さんは 20 歳代から増え始めて、がんの治療で子宮を失ってしまう（妊娠できなくなってしまう）人も 30 歳代までに毎年、約 1,000 人います。また、高齢者も含めて子宮頸がんが原因で毎年、約 3,000 人の女性が亡くなっています。

○ 子宮頸がんにかかる仕組み

子宮頸がんは、ヒトパピローマウイルス（HPV）に持続的に感染することで、子宮頸部に異形成（がんになる手前の状態）を生じた後、がんに至ることが明らかになっています。HPV は、女性の多くが一生涯に一度は感染するといわれるウイルスです。ウイルスに感染したとしても、ほとんどの人はウイルスが自然に消失しますが、一部の人で HPV の感染が持続した状態となり、数年から数十年かけて進行し、子宮頸がんに至ります。また、ヒトパピローマウイルス（HPV）の感染は、主に性交渉によって起こるので、感染のリスクは一生涯のうちに何度も起こりえます。

○ 子宮頸がんの治療

子宮頸がんは、早期に発見し手術等の治療を受ければ、多くの場合、命を落とさず治すことができる病気です。

進んだ前がん病変（異形成）や子宮頸がんの段階で見つかり、手術が必要になります。

病状によって手術の方法は異なりますが、子宮の一部を切り取ることで、妊娠したときに早産のリスクが高まったり、子宮を失うことで妊娠できなくなったりすることがあります。

イ 予防接種の方法

定期予防接種として接種できる子宮頸がん予防ワクチンは、サーバリックス（2価）、ガーダシル（4価）、シルガード9（9価）の3種類があります。接種開始後、同じ種類のワクチンで接種を完了することが原則です。

(7) 接種対象者 小学校6年から高校1年生相当の女子

※接種をお勧めする年齢（標準の接種年齢）と接種回数：中学1年生の間に規定回数

(イ) ワクチンの種類

ワクチンの種類	説明	接種回数		標準的な接種間隔
		対象年齢	回数	
サーバリックス (2価)	子宮頸がんの主な原因となる HPV-16 型と 18 型に対するワクチン	全年齢共通	3回	初回接種の1か月後と6か月後に追加接種
ガーダシル (4価)	HPV-16 型と 18 型に加え、尖圭コンジローマの原因となる HPV-6 型と 11 型の計 4 つの型に対するワクチン	全年齢共通	3回	初回接種の2か月後と6か月後に追加接種
シルガード9 (9価)	4価の標的とする型に加え、子宮頸がんの原因となる他の5種類の型(31 型、33 型、45 型、52 型、58 型)の計9つの型に対するワクチン	初回接種時の年齢が 15 歳未満	2回 (※)	初回接種の6か月後に追加接種
		初回接種時の年齢が 15 歳以上	3回	初回接種の2か月後と6か月後に追加接種

※ 2 回目の接種が初回接種から 5 か月未満となった場合は、3 回目の接種が必要になります。

(ウ) 用法・用量

ともに**筋肉内**に 0.5ml 接種します。

◇接種をおすすめする年齢と無料で受けられる年齢

① 接種をおすすめする年齢 (標準の接種年齢/丸数字は何回目の接種かを表します。) 無料で受けられる年齢 (法律で定められている接種対象年齢)

年齢	H25年度生 小学 6年生	H24年度生 中学 1年生	H23年度生 中学 2年生	H22年度生 中学 3年生	H21年度生 高校 1年生相当	H20年度生 高校 2年生相当	H19年度生 高校 3年生相当	H18年度生	H17年度生	H9年度生
子宮頸がん予防 【サーバリックス(2価)】 【ガーダシル(4価)】		① ② ③								
【シルガード9(9価)】		① ②(※2) ①②③(※3)								
<p>★各年度生: 当該年4月2日～翌年4月1日の間に生まれた方</p> <p>※1 経過措置について * R4.4.1～R7.3.31に1回以上接種した下記の方に限り、R8.3.31まで期間延長 * 対象者: 救済措置対象者 H9.4.2生～H20.4.1生 救済措置最終年度の高1相当 H20.4.2生～H21.4.1生 ※2 9価の初回接種時の年齢が15歳未満の方の標準スケジュール ※3 9価の初回接種時の年齢が15歳以上の方の標準スケジュール</p>										

やむを得ず接種期間の変更が必要な場合

- サーバリックス（2価）
2 回目の接種は 1 回目の接種から 1 か月以上の間隔で、3 回目の接種は 1 回目の接種から 5 か月以上で、かつ、2 回目の接種から 2.5 か月以上の間隔を空けて実施。
- ガーダシル（4 価）
2 回目の接種は 1 回目の接種から少なくとも 1 か月以上、3 回目の接種は 2 回目の接種から少なくとも 3 か月以上間隔を空けて実施。
- シルガード9（9 価）
初回接種時の年齢が**15歳未満**：追加接種は初回接種から少なくとも 5 か月以上間隔をおいて実施。
初回接種時の年齢が**15歳以上**：2 回目の接種は 1 回目の接種から少なくとも 1 か月以上、3 回目の接種は 2 回目の接種から少なくとも 3 か月以上間隔を空けて実施。

ウ 積極的勧奨の再開に伴う対応について

積極的勧奨の差し控えにより接種の機会を逃した方への救済措置として、接種が完了していない方のうち、生年月日が「平成9年4月2日～平成20年4月1日」の間の方は、救済措置として、令和4年4月1日から令和7年3月31日まで接種が可能でした。

更に、救済措置最終年度(令和6年度)での接種希望者の増加に伴うワクチン不足等を踏まえ、国により経過措置が設けられました。救済措置対象者と、救済措置期間の最終年度に高校1年生相当であった方で、救済措置対象期間中(令和4年4月1日から令和7年3月31日まで)に1回以上接種した方は、残りの回数について令和8年3月31日まで無料で接種が可能です。

エ 子宮頸がん予防ワクチン(HPVワクチン)の効果とリスク (参考:厚生労働省作成リーフレット(2025年2月改訂版))

サーバリックスおよびガーダシルは、子宮頸がんをおこしやすい種類(型)であるHPV16型と18型の感染を防ぐことができます。

そのことにより、子宮頸がんの原因の50～70%を防ぎます。

シルガード9は、HPV16型と18型に加え、ほかの5種類のHPVの感染も防ぐため、子宮頸がんの原因の80～90%を防ぎます。

子宮頸がん予防ワクチン(HPVワクチン)の接種を1万人が受けると、受けなければ子宮頸がんになっていた約70人ががんにならなくて済み、約20人の命が助かると試算されています。

一方で、子宮頸がん予防ワクチン(HPVワクチン)接種後には、多くの方に、接種部位の痛みや腫れ、赤みなどが起こることがあります。痛み等の頻度が高いワクチンであり、接種の痛みや緊張のために、血管迷走神経反射が出現し、失神することがあります。接種後は少なくとも30分間は背もたれのある椅子に座っていただき、座位で様子をご覧ください。前に倒れる場合がありますので、注意して様子を観察してください。

また、まれに、重い症状(呼吸困難やじんましん等<アナフィラキシー>、手足の力が入りにくい<ギラン・バレー症候群>、頭痛・嘔吐・意識低下<急性散在性脳脊髄炎>)が起こることがあります。因果関係があるかどうかわからないものや接種後短期間で回復した症状を含めて、子宮頸がん予防ワクチン(HPVワクチン)接種後に生じた症状として報告があったものは、接種1万人あたり、サーバリックスまたはガーダシルでは約9人、シルガード9では約3人です。

このうち、報告した医師や企業が重篤と判断した人は、接種1万人あたり、サーバリックスまたはガーダシルでは約5人、シルガード9では約2人です。

【接種後の主な副反応】 参考:厚生労働省リーフレット(2025年2月改訂版)

発生頻度	サーバリックス(2価)	ガーダシル(4価)	シルガード9(9価)※
50%以上	注射部位の痛み・赤み・腫れ、疲労感	注射部位の痛み	注射部位の痛み
10～50%未満	かゆみ、腹痛、筋痛・関節痛、頭痛 など	注射部位の赤み・腫れ	注射部位の腫れ・赤み、頭痛
1～10%未満	じんましん、めまい、発熱 など	頭痛、注射部位のかゆみ、発熱 など	浮動性めまい、吐き気、下痢、注射部位のかゆみ、発熱、疲労、内出血など
1%未満	注射部位の知覚異常、しびれ感、全身の脱力	下痢・腹痛、四肢痛、筋骨格硬直、しこり、出血、不快感、倦怠感 など	嘔吐、腹痛、筋肉痛、関節痛、注射部位の出血、血腫、倦怠感など
頻度不明	四肢痛、失神、リンパ節症 など	失神、嘔吐、筋痛・関節痛、疲労 など	しびれ感、失神、四肢痛 など

オ 子宮頸がん検診

子宮頸がんの対策は、子宮頸がん予防ワクチンでHPVの感染を予防することに加えて、子宮頸がんを早期発見するため、子宮頸がん検診を定期的に受けることが重要です。このため、20歳になったら、2年に1回、子宮頸がん検診を受けることをおすすめしています。

(参考:子宮頸がん予防ワクチン(HPVワクチン)の予防接種に係る現在までの取り巻く状況について)

時 期	内 容
平成 22 年 10 月	厚生科学審議会感染症分科会予防接種部会（国の専門家会議）意見 「ヒブ、小児用肺炎球菌、子宮頸がん予防ワクチンは、予防接種法上の定期予防接種に位置づける方向で急ぎ検討すべきである。」
平成 22 年 11 月	国が「子宮頸がん等ワクチン接種緊急促進臨時特例交付金交付要綱」制定 ⇒各都道府県に基金が造成され、23 年 1 月以降、市町村の接種費用助成が開始。
平成 23 年 2 月 ～平成 25 年 3 月	横浜市においても、ヒブワクチン、小児用肺炎球菌ワクチンとともに子宮頸がん予防ワクチンの接種費用助成事業を実施。
平成 25 年 3 月頃	子宮頸がん予防ワクチン接種後の痛みを訴える報道等が新聞・テレビ等によって放送され始める。
平成 25 年 4 月	予防接種法に基づく定期予防接種に位置付けられる。
平成 25 年 6 月 14 日	厚生科学審議会 予防接種・ワクチン分科会 副反応検討部会 勧告 「ワクチンとの因果関係を否定できない持続的な疼痛が子宮頸がん予防ワクチンの接種後に特異的に見られたことから、同副反応の発生頻度等がより明らかになり、国民に適切な情報提供ができるまでの間、定期接種を積極的に勧奨すべきではない。」 ⇒国が積極的勧奨の差し控えを通知。以降、全国の市町村で子宮頸がん予防ワクチンの定期接種に係る積極的勧奨が差し控えられる。
令和 3 年 10 月	厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会 「最新の知見から、接種後の多様な症状とHPVワクチンの関連は明らかになっていないこと、ワクチンの子宮頸がんに対する予防効果がわかってきたことなどから、大きな方向性として、積極的勧奨の再開を妨げる要素はない。」
令和 3 年 11 月	○厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会 「HPVワクチンの積極的勧奨を差し控えている状態を終了させることが妥当である。」 ○厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会 積極的勧奨を差し控えていたことにより接種の機会を逃した方へのキャッチアップ接種について、公費で接種できる機会を設ける方向で議論が開始される。
令和 3 年 11 月 26 日	国が積極的勧奨の再開を通知
令和 3 年 12 月 28 日	国が救済措置（キャッチアップ接種）の実施を通知
令和 4 年 11 月 30 日	国が令和 5 年 4 月から従来の 2 価ワクチン、4 価ワクチンに加えて 9 価ワクチンを定期接種として使用するワクチンに追加することを通知
令和 5 年 4 月	9 価ワクチンが予防接種法に基づく定期予防接種に位置付けられる。
令和 7 年 4 月～ 令和 8 年 3 月	救済措置（キャッチアップ接種）の経過措置を実施

9 予防接種の救済制度

定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障が出るような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく補償を受けられる場合があります。予防接種による健康被害が生じた場合には、最寄りの医療機関で受診するとともに、お住まいの区の区役所福祉保健課健康づくり係又は医療局健康安全課予防接種係へご相談ください。

◆ 副反応について

副反応には、ワクチンを接種した後に起こる発熱、接種部位の赤み・腫れなどの比較的良好とみられる軽い副反応や、極めてまれに発生する脳炎や神経障害など重大な副反応もあります。

しかし、その副反応はワクチンの接種が原因ではなく、偶然、ワクチンの接種と同時期に発症した感染症などが原因であることがあります。

このため、予防接種後健康被害救済制度では、ワクチンの接種による健康被害であったかどうかを個別に審査し、ワクチンの接種による健康被害と厚生労働大臣が認定した場合に給付をします。

◆ 給付の決定について

申請書やカルテ等、ご提出いただいた書類をもとに横浜市、厚生労働省が必要書類や症状のチェックを行い、厚生労働省が設置する外部有識者で構成される疾病・障害認定審査会で審査を行います。

審査の結果を受け、横浜市から支給の可否をお知らせいたします。

◆ 給付の種類

(7) 医療機関での治療を受けた場合

治療に要した医療費(自己負担分)と医療を受けるために要した諸費用を支給します。

(4) 障害が残ってしまった場合

年に4回、障害の残ったお子様を養育するための障害児養育年金(18歳以上の場合は、障害年金)を支給します。

(ウ) 亡くなられた場合

葬祭料及び一時金を支給します。

【参考】医療機関乳幼児健康診査（無料育児相談）

① 内容

生後12か月（13か月未満）までに3回、医療機関で健康診査が無料で受診できます。詳細は、母子健康手帳に付いている健診券綴りをご確認ください。

② お問い合わせ先

横浜市こども青少年局地域子育て支援課
電話番号 045-671-2455

【参考】区役所で実施している乳幼児健康診査（4か月児、1歳6か月児、3歳児）

お子さんが体も心もすこやかに成長されるように、そして病気などがあれば早く専門医療機関等を受診できるよう、お子さんの発育や発達を成長の節目に、各区福祉保健センターで健康診査を実施しています。また、保健師や栄養士、歯科衛生士等が、育児に必要な情報提供や育児の困りごとの相談を行い、子育てを支援します。

各健康診査の受診日時は、各区福祉保健センターから「健診のお知らせ」を郵送しますのでご確認ください。

書式例

※コピー使用可

年 月 日

委任状

委任者 (親権者)	フリガナ								
	氏 名							印	
	住 所								
	電話番号								
	メール(任意)								
	接種を受ける者 (被接種者)	フリガナ							
		氏 名							
生年月日			年		月		日		

※委任者名は必ず自署又は記名・押印でお願いします。

私は、上記被接種者の予防接種に係る手続き及び実施の判断について、
下記の者を代理人と定め委任します

受任者	フリガナ							
	氏 名							
	住 所							
	電話番号							
	メール(任意)							
	接種を受ける者との続柄							

お問い合わせ先

【電話でのお問い合わせはこちらまで】

横浜市予防接種コールセンター

横浜市が実施している予防接種に関するご質問にお答えします。
お気軽にご相談ください。

- * 定期接種のスケジュールについて聞きたい
- * 予防接種の案内（予診票（接種券））はいつ届きますか？ など

TEL : 045-330-8561

FAX : 045-664-7296

受付時間：9時～17時（土日祝日・年末年始除く）

対応言語：日本語、English、中文、한국어、Tiếng Việt、नेपाली

【内容により、区役所福祉保健課健康づくり係でのお手続きが必要な場合があります。】

- (例) * 横浜市以外の市区町村で予防接種を希望する方（償還払いのご相談は、接種する前に一度お電話ください）
* 市外から横浜市へ転入された方で接種対象の予防接種がお済みでない方 など

福祉保健課健康づくり係（電話→平日8:45～17:15 窓口→平日8:45～17:00 土日祝日・年末年始除く）

お問い合わせの際は「母子健康手帳（または接種記録のわかるもの）」を必ずご用意ください。

※医療機関乳幼児健康診査（無料育児相談）については、こども家庭支援課へお問い合わせください。

青葉	☎ 978-2438	F A X 978-2419	瀬谷	☎ 367-5744	F A X 365-5718
旭	☎ 954-6146	F A X 953-7713	都筑	☎ 948-2350	F A X 948-2354
泉	☎ 800-2445	F A X 800-2516	鶴見	☎ 510-1832	F A X 510-1792
磯子	☎ 750-2445	F A X 750-2547	戸塚	☎ 866-8426	F A X 865-3963
神奈川	☎ 411-7138	F A X 316-7877	中	☎ 224-8332	F A X 224-8157
金沢	☎ 788-7840	F A X 784-4600	西	☎ 320-8439	F A X 324-3703
港南	☎ 847-8438	F A X 846-5981	保土ヶ谷	☎ 334-6345	F A X 333-6309
港北	☎ 540-2362	F A X 540-2368	緑	☎ 930-2357	F A X 930-2355
栄	☎ 894-6964	F A X 895-1759	南	☎ 341-1185	F A X 341-1189

関連ホームページ

ア 横浜市（予防接種のページ）：予防接種に関する情報が掲載されています。



QRコードが読み取れない場合は、[横浜市 予防接種](#)で検索

イ 横浜市衛生研究所：感染症に関する情報などが掲載されています。



QRコードが読み取れない場合は、[横浜市衛生研究所](#)で検索

編集発行元：横浜市医療局健康安全課